山下佐知子を支える万年アスリート教授

鳥取大学陸上部顧問
油野利博さん

大学では一度も燃え尽きなかったんです
走ることに進路を変えた時〝そうか〟と。

文・武田 薫
写真／川村高弘

◇あぶらの・としひろ
1945年6月21日、石川県生まれ。金沢泉ケ丘高校時代から陸上競技を始め、1年生からインタハイ出場。さらに東京教育大学体育学部でもインカレ、箱根駅伝で活躍した後、1968年4月に鳥取大学教育学部へ。同大学の陸上部顧問を務める傍ら、鳥取市陸協理事長、県陸協副理事長として普及強化に携わってきた。

おかっぱの黒髪

8月の東京――。

油野先生は、真剣な顔で、山の手線の窓に携帯テレビを擦り寄せていた。画像は諦めた。せめて音だけでも。雑音まじりで、アナウンサーは山下佐知子の名前を繰り返す。隣に座る山下の母・寿美恵さんにその一言一言を伝え、自分の感想も付け加えた。

品川駅前でロザ・モタが棄権し、山下が先頭集団に残っているのを二人はその目で見て来たばかりだった。

寿美恵さんは不安そうにうなずき、そのたびに先生は、大丈夫だ、と力を込めて励ました。

だが、寿美恵さんに言っているわけではなかった。自分自身に言い聞かせていることに気付き、先生は眼鏡を拭いて小さく笑った。

アナウンサーの名前もヤマシタか、悪くない。早く競技場に戻らなければ。

夏の陽に、朱色ほどに燃えるトラックに、教え子が入ってきた。規則的に揺れるおかっぱの黒髪が、レースの成功をそのまま伝え、歓声は東京オリンピックほど沸き上がり、先生は感動に震えて汗と少しの涙を拭いた。報道陣が蟻のように走り寄って行った。

信じられなかった。

こんなはずでもなかったのだ。

浅川先生、と恩師の顔を思い出した。

巡り会い

第3回世界陸上選手権のヒロインとなった山下佐知子は、大阪生まれだが、6歳から両親の郷里・鳥取県鳥取市に移り、育った。

地方の国立大学から巣立った珍しい選手であり、油野先生は鳥取大学教育学部で4年間、山下を見守ってきた恩師だった。

「与えられた環境の中で最大の努力をする選手でした」

陸上部顧問といっても、教員養成が本来の仕事である。

目に見える結果よりも目に見えない過程が大切だ、そう常々生徒たちに繰り返し、結果は自分自身が評価するものだと言ってきた先生にとって、黙々と努力し、陸続と自分の道を開いてきた山下佐知子はメダル以前に、自慢の教え子だった。

目に見えないはずの過程が白日の国立競技場にさらされたとき、師の心にどのような感情が走ったかは想像を超える。

華やかさに目を奪われない指導者からこそ、素質は花開く——そう無理矢理自分に言い聞かせて鳥取に来て、四半世紀が経っていた。

油野先生は石川県の出身である。

金沢泉ケ丘高校時代からひたすら走り続け、それなりの実績も残していた。

インタハイは400㍍で3年間出場し、東京教育大学に進んでからは3年生のインカレで1600㍍リレー優勝。その年の箱根駅伝ではアンカーを務め、有吉正博さん（現・学芸大学助教授）からタスキを受けた。

区間タイムが、前年のアンカー、山西哲郎先輩（現・群馬大学助教授）より3分以上よかったことが、いまでもかなりの自慢だ。これらの先生同様に、走ることが好きだった。

国体も都合6回出場している根っからのアスリートは、卒業後に郷里・石川に帰りたかった。

自分の夢をかなえてくれる競技者を育てたい、それには郷里に戻るのが一番だ、そう思ったからである。

教員採用試験も通った。

しかし、担当教授の浅川正一先生（ローマ五輪ヘッドコーチ）は、自身の出身県である鳥取大学に行くことを薦めた。

チームで一人の選手を育てるのもいい。だが、先生を送り出すことでどれほどの選手に考えを伝えることができるか、それも考えてみないか。

その理屈は理解できた。

しかし、鳥取大学は全国でも一番生徒数の少ない国立大学だった。率直に言って、そこに赴任することは、選手育成の夢を捨てることを意味した。

だからだろう、油野さんは鳥取に行ってからも2年間走り続け、鳥取代表としても国体に出場している。

やがて県陸協の仕事に、審判員として、彼のアスリートの夢は広く、しかし薄く地域へと根をおろしていく。

そんな忘れかけた夢の抜け殻に、彼女は忽然と現れたのである。

荒削り

山下佐知子は、東中学時代から地元では知られた選手だった。3年の時に800㍍で2分18秒6の山陰中学生記録をマークして全国大会にも出場。

当時、中学の監督だった三橋武彦さんから意見を求められた油野先生は、ずいぶん荒削りな走りだ、という感想を述べていたらしい。

大学4年の時の全国都道府県女子駅伝（87年）にて。山下は第1区を走り、区間賞を獲得。一躍全国に名を知らしめた（油野氏所蔵）

荒削り——当時は小さな身体をいっぱいに使ったストライド走法だった。その姿に、山下の内に秘めた闘志はみなぎり、決して泣き言を言わない勝ち気な少女が写し込まれていただろう。

父・弘次さんが43歳の若さで他界したとき、彼女は中学2年生である。その葬儀が終わるや「合宿に行っていい？」と尋ね、打ちひしがれた母親を狼狽させたエピソードが残る。

後ろを振り返りたくない——山下佐知子にとって陸上競技は、とりあえず、前を見る術（すべ）だったのである。

「東高校の近藤先生（近藤矩夫先生＝現八頭高校教諭）から受験する話は聞いており、学力的にも問題なさそうなので楽しみにしていました」と油野先生は話す。

鳥取東高校時代、決勝にこそ進めなかったが、インタハイに3年間出場した力は高く評価されていた。

本当は東京に出たかった。ただ、母と妹を残して出るワケには行かぬ家庭の事情があった。大学に行けるだけでも…。

「鳥取大学には入りたい一心だったと思いますよ」と先生は思い出す。

体育実技の試験日のことである。雨のために屋内で行われたハードルを、山下は1回目に倒した。ガーンという反響音の後に、大きな声が続いた。

もう1回、やらせてください。

ハードルは初めから2回やることになっていたが、その大声からひたむきさが伝わってきた。

新入部員歓迎の席で、彼女は日本一を目指して頑張ると豊富を語っている。その言葉に違和感を覚える、そんな場所が銀メダリストのスタートでもあったのだ。

急展開

山下は期待されていた。

それは森下広一の場合も同じなのだが、山下が大学3年になる85年に地元・鳥取で国体が開かれることが決まっていたからである。

彼女は1年から候補選手に指定され、午後5時から2時間ほどの限られた練習時間の中で、全国で目立つことはなかったにしろ、着実に自己記録を伸ばして行った。

1年の時に3つの大会記録と2つの県記録を作り、2年の時には8つの記録を出している。

わかとり国体を迎えた。

種目は5000㍍だったが、2週間前の全日本インカレ3000㍍で県新記録の9分45秒83で2位に入った彼女には、一層大きな期待がかけられていた。

だが、辛い思い出に変わる。

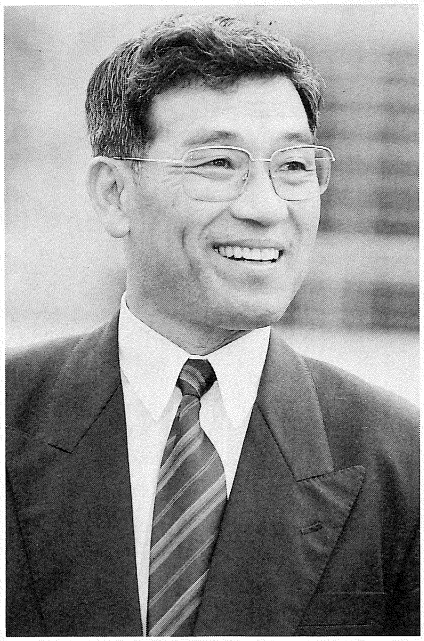
右足の痛みを隠してスタートラインに立てば、スターターは皮肉にも油野先生だった。17位である。

「オーバートレーニングになっていたようです。2周過ぎから足を引きずっていました。サブトラックに行って慰めたんです。最善を尽くしたんだから、結果は仕方ないじゃないかと。泣きましたね。すみません、と。初めてでしたね、あの子が泣くのを見たのは」

ショックは尾を引き、2カ月ほど練習からも遠のいたという。

先生はじっと見守った。

「山下は地元の国体で足を洗う積もり


笑顔どおりのおだやかな人柄

だったと思います。4年生になったら、卒論や教育実習など学校も忙しくなりますから。4年間、一度も燃え尽きなかったんです」

大学スポーツの位置は微妙である。そこですべてを吐き出させるのか、それともその先の地固めの段階か。その見極めは微妙だ。

先生は、燃え尽きさせなかったのではなかったのだろうか。結果よりも過程であると説くことは、少なくともすぐ目の前にゴールは置いていないことである。

くすぶりが、4年目の冬に爆発する。全国都道府県対抗女子駅伝で第1区を走った山下は、区間賞で一躍、全国区に躍り出、ここから世界は急展開を見せる。

全日本クロスカントリー選手権で日本人2位に入り、初めて日本代表として走った横浜国際女子駅伝では国内最優秀選手に選ばれ、さらにワルシャワで開かれたクロスカントリー世界選手権の日本代表として、ついに海外に飛び出した。

そのクロカン遠征で京セラ監督だった浜田安則・現陸連強化委員と出会い、マラソンという新しい道へと続いて行くのである。

夢を持つこと

父・弘次さんが亡くなる前、こんなことがあった。娘たちの着物姿を見たいと言われ、元旦にそろって晴れ着で病院へ出かけた。喜んだ弘次さんは、「佐知子、後ろ姿も見せてくれるか」

そうベッドから声をかけた。ところが、寒々しいおかっぱ頭を見ると、「頭がさみしいね」と言って、翌日、息を引き取った。

油野先生にも、黒いおかっぱ頭に思い出があった。

父の言葉が残っていたのか、彼女は卒業式に着物を着るために暮れから髪を伸ばしていたという。

ところが、世界クロカンの遠征から戻ったとき、髪は再びおかっぱに戻っていたのである。

春からは付属中学の講師としてのスタートが決まっていた。先生が恩師を口説いて決まった道だったが、その髪を見て、既に山下の心の奥を見ていたかも知れない。

一学期が終わって、山下は中学の校長先生に退職を申し出る。校長先生は赴任の経緯から、油野先生の了解を求め、先生はただ一言、そうか、決めたか、とだけ言った。

油野先生はこう言う。

「私は、あれをやれ、これをやれ、そういう指導はしません。レースは一人です。判断は本人がやらなければならない。私はあらゆる資料、材料を用意しておくだけです。山下はその材料をうまく使ってくれた。京セラに行くとき、こう言ったんですよ。教壇で教えるのも、走ることで多くの人に感動を与えるのも同じかも知れないね」

恩師が油野先生を説得した台詞は20年でそのように変わり、さらに5年後に東京を燃やした。

山下佐知子は、すべての出発点になった都道府県駅伝の記録集に、国体後の5カ月間にウェイトトレーニングをやっていたことを明かしている。そして、こう書き残している。

『夢が実現するかどうかより、夢を持つことに、私はロマンを感じる』

師の教えは、確かに伝わっていたのである。